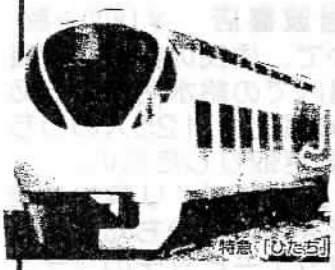
今日5月10日
(5月第2日曜)母の日
carnation
父の日は
6月第3日曜
rose

九条はらまち

福島県南相馬市原町区
「はらまち九条の会」会報 No.343
2020(令和2)年5月10日(日)発行

常磐線全線復旧　特急での原ノ町から東京日帰りは無理


特急「ひたち」

3月14日、大震災以後ＪＲ常磐線（日暮里～岩沼、約344ｋｍ）の最後の不通区間浪江・富岡間が復旧し、9年ぶりに全線が再開しました。品川駅・上野駅～仙台駅間には特急「ひたち」が一日3往復で直通運行されます。ところが原町から「ひたち」で上京し日帰りするには原ノ町駅発11：07～東京着14：42で、下りは東京発15：53～原ノ町着19：24で在京1時間です！？鈍行に乗車していわき駅で特急に乗り換えれば在京時間も増えますが、いわき以北の浜通りの私たち住民をどう思っているのでしょう。

3.11・原発事故から9年　あの日、あの頃を忘れないために

○東日本大震災 南相馬市の被害　2020年3月8日『福島民報』

津波などの直接死亡者525人・死亡届111人（県内最多）
原発事故での関連死亡者516人（全国で最多）
・死者合計1152人　・行方不明者87人（いずれも県内最多）
震災時の市人口71，561人　⇒2020年4月1日　53，179人

- ●県内の「小児甲状腺がん」236人（2019年6月NPO子ども基金）
- ●県内の「震災・原発事故関連自殺者」2011～2019年　115人

「飯崎のしだれ桜」は、福島県内写真家が選ぶ今年の「県内一本桜番付」で相双地区唯一の新入幕。市民を元気づけています。

「飯崎のしだれ桜」
紅枝垂れの古木で、南相馬市小高区飯崎の北久保共同墓地内（標高29m）にあります。太さ3．6m、高さ約12m、枝振りは約300㎡にわたって傘状に広がり、お墓を包み込むように花を咲かせます。知る人ぞ知る名桜で南相馬市指定天然記念物です。

飯崎（はんさき）の桜　若松丈太郎

いつもの年なら
人びとの目をなぐさめ楽しませる
樹齢三百年のべにしだれ桜は
愛でる人なしにことしは散った

丘のうえの小さな墓地の中央
傘状に枝をひろげて墓地を包んで
夕陽をうけて妖しい色に染まる
死者のために咲くべにしだれ桜

丘からははるかに海が望める
津波が襲った海岸からは
妖しく咲くべにしだれ桜が見えるだろう

死者をなぐさめるためにのみ咲いて
原発事故で立ち入りが禁止され
無人となった丘のうえで咲いて

（二〇一一年十月二十五日。コールサック社『若松丈太郎 詩選集一三〇篇』より）

トリチウム汚染水の海洋放出で関東圏も汚染されることに

汚染水の流れ
シミュレーション

「<上図>のように、福島第一原発のタンクの汚染水を海洋放出すると、一端は宮城県沖に北上し、強力な北からの親潮で南下します。

しかし、茨城県沖で南からの黒潮と衝突して渦を巻いてしばらく停滞し、その間、トリチウム水は塩水より軽いので海水表面に広く広がり、2018年9月の台風24号の塩害のように、風や上昇気流で関東地方を広く汚染する危険があります。

政府の「トリチウムは無害」というのは虚偽の主張です。」

（緑風出版『東京五輪がもたらす危険』P．107　山田耕作京都大学名誉教授「トリチウムの特別の危険性」より）

No.343

"3.11と原発事故"を考えつづけるための本

『3.11を心に刻んで 2020』

岩波ブックレット1021　¥700E

本会の会員さんが4名も執筆

2011年5月から震災への思いを綴った25人の寄稿文や、識者8名による震災のブックガイドも必読です。その中で、はらまち九条の会会員の3名が執筆し、関連1名も掲載。「憲法くん」の松本ヒロさん、高校教員の渡部義弘さん、羽田貴史さんの寄稿文では義父母Oさんの小高区から広島県までの避難の様子が詳細に述べられています。

ブックガイドでは詩人若松丈太郎さんが『原発に子孫の命は売れない』『アサツユ一九九一～二〇一三』『福島と原発』を推薦。また民俗学者赤坂憲雄さんは『若松丈太郎詩選集一三〇篇』を推薦されています。

『東京五輪がもたらす危険』

緑風出版　¥1,800＋税

「アンダーコントロール」と世界を騙して誘致した東京五輪ですが、参加するアスリートや観客や観光客には放射能被曝はないのか。ほとんど報道されない危険性を警告するため科学者・医師・避難者・市民により緊急出版されました。

福島県民の成人病や死亡率上昇、小児甲状腺ガンの増加、またトリチウム汚染水を海洋放出すれば東京方向に流れて関東が汚染される危険など、慄然とさせられます。南相馬市議のOさんも執筆。本は東京の会員Yさんから贈呈され、一気に読みました。

『ふくしま原発 作業員日誌』

片山夏子著　朝日新聞出版　¥1700＋税

東京新聞片山夏子記者が、原発事故直後から9年にわたり取材し連載してきた、イチエフ（東電福島第一原発）の真実、現場作業員の本音を綴る。事故原発を厳しく告発報道してきた東京新聞の矜持を感じさせます。今年の第2回「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」の大賞を受賞しました。

『聞き書き南相馬』

渡辺一枝著　新日本出版社　¥1700＋税

11年8月から毎月南相馬市に通い続け、被災民の「生の声」でなければ実情は伝わらないと、聞き書きの形での詳細な体験集。著者は作家椎名誠氏の夫人です。

『孤塁　双葉郡消防士たちの3・11』

吉田千亜著　岩波書店　¥1800＋税

原発が暴走するなかで、住民の救助や避難誘導、爆発した原発構内での給水活動にもあたった双葉消防本部の消防士、125人のうち66人の体験を著者が聞き取りしたもの。

一歩間違えば、チェルノブイリ事故の消防士のように凄惨な死を迎えたかも知れず、スベトラーナ・アレクシェービッチの『チェルノブイリの祈り』を連想させます。

橋口勝利著『大学生、福島を聴く 東日本大震災と「心の復興」』

関西大学出版部　¥2400＋税

大震災直後から9年間、「福島の今を関西に伝える」のテーマで、大学生たちが何度も福島に足を運び、県庁、南相馬市、富岡町などの自治体、被災者、仮設住宅、学校、保護者への取材を重ね、被災地福島の声や状況、除染や帰還や地域振興の深刻な課題をまとめ上げたもの。同時に大学生たちが何を学び、どう変わったかも興味深い視点です。

西　芳照『サムライブルーの料理人 3・11後の福島から』

白水社　¥1500＋税

東京五輪の聖火リレーのスタート予定地だったJヴィレッジの元総料理長の西芳照さんは南相馬市小高区出身。3.11の地震と津波、さらに原発事故に遭遇し、小高区の両親や家族の避難で大混乱に陥り苦悩します。

やがてJヴィレッジは原発事故対応の拠点になり、作業員に温かい食事を提供するため、西さんは粉骨砕身の努力を重ねます。震災直後から3年間の獅子奮迅のご奮闘の記録ですが、サッカー日本代表の専属シェフとして、選手からの信頼も大変篤いことが紙面から伝わってきます。

『私はあいちゃんの ランドセル ―福島原発事故の記録』

写真・文 菊池和子　遊行社　¥2000＋税

震災直後から被災地、特に津波と原発事故被災の浜通りに頻繁に通い続け記録写真を撮影。それぞれの写真に擬人法で文を綴り、原発事故の不条理を静かに訴えています。